

緑肥・堆肥施用による能登赤土の土壌改善

1 背景・目的

近年、能登地域に県内外の企業等が農業参入し、新たな担い手となっている。しかし、能登地域の畑地の多くは赤土で保肥力がある一方、稠密で固まりやすく、また作物の生育に必要な有機物含量が少ない(図1)。



図1 能登赤土の様子

そこで、堆肥の施用と緑肥栽培とを組み合わせることにより、能登の赤土を早期に改善する技術の確立を目指す。

2 技術のポイント

牛ふん堆肥の10t、20t施用と3回の緑肥作物の鋤込みで、土壌肥沃度の指標となる腐植含量が目標値の3%以上に維持される(表1、図2)。

表1 堆肥と緑肥の施用時期

	2018		2019	
	6/中	8/上~10/上	4/中~6/下	7/中~8/下
牛ふん堆肥 施用 (5t,10t,20t)				
ソルゴー		播種~刈取・鋤込 (乾物 585kg/10a)		播種~刈取・鋤込 (乾物 110kg/10a)
ヘイオーツ (エンバク野生種)			播種~刈取・鋤込 (乾物 103kg/10a)	

緑肥の乾物重は牛ふん堆肥施用区の平均値

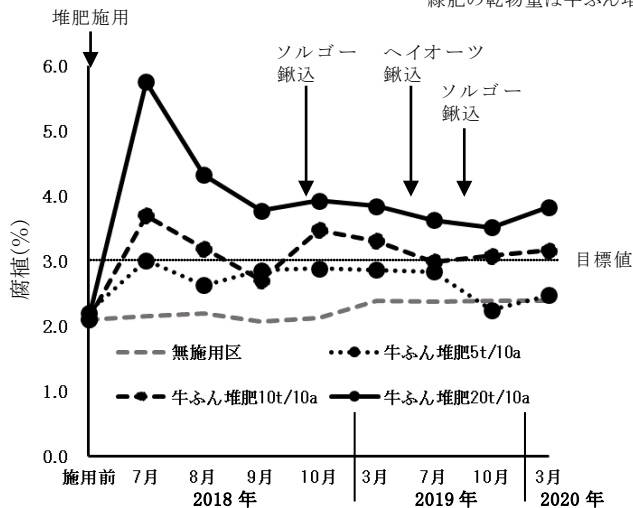


図2 腐植含量の推移

3 成果の活用と残された課題

- (1) 緑肥3作の連用と堆肥施用により、野菜栽培の適した土に改善される。
- (2) 堆肥を施用した圃場では、土壌水分が高いと砕土性が低下するため、乾燥時に耕うんする。